

## 紹介

## 水無瀬神宮文書

大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書 第十一輯

大 阪 府

昭和十四年春、畏くも、後鳥羽天皇御七百年式年に當つて、大阪府三島郡島本村に鎮座する官幣中社水無瀬宮を官幣大社に列せしめ、神宮の嘉號を贈り給ひ、いとも嚴かに御式年祭の盛儀を執行せられた。當時このめでたき御式典の御模様を傳聞して、今更ながら御祭神後鳥羽・土御門・順德三天皇の御聖徳を欽仰し奉つたあの感激は、いまだなほさめやらぬ心地がするのである。大阪府に於ても、天皇の御聖徳を偲び奉り、且は光輝ある紀元二千六百年の記念事業たる府下歴代天皇聖蹟調査の一環として、當社所藏の文書記録を精査せらるゝところがあつたのである。今回大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書の第十一輯として上梓せられた、水無瀬神宮文書の一冊は、即ちその調査の成果である。

本社の由來は、云ふまでもなく後鳥羽天皇御治世の頃此地に離宮を營ませられて、四季折々の御遊に興じ給ふところが、その崩後御遺領を賜はりたる水無瀬信成親成父子が、この離宮趾に御影堂を營み奉つて、御菩提を弔ひ奉つたことに始まるのである。寂

しく遠島に崩せられた天皇の御尊靈を慰めまつりたい衷心からの願望と、凶變のことの打續くにつれて募り行つた御威靈への畏怖のころは、やがて奉祀のこの日を追うて厚く、崇敬のこの時を追うて深からしめたのであつた。爾來當社奉齋のことは、退轉を見ることなく、社運益々隆盛に赴くことゝなつた。今回版行せられたる當社の所藏文書によれば、如實に御神徳に關する數々の史實を、眼前に展開してくれるであらう。

さて本書は、當社所藏文書を、第一後鳥羽天皇宸翰、第二御歴代天皇宸翰・綸旨・院宣等、第三奉納法樂和歌、第四記録類、武家文書等の四部に分ち、總數百二十通を收め、且つ圖版二十四葉を添へ、更に附するに調査委員魚澄徳五郎氏の「御所藏文書より見たる水無瀬神宮の沿革」同天坊幸彦氏の「郷土史より見たる水無瀬宮」の二論説を以てしてゐる。文書内容の紹介は、到底限られた紙幅になし能はざるところであるから、次に若干刊行形式について心付いた點を附言する。

近時古文書刊行の方法は、種々と工夫を加へられ、新機軸を出しつゝある。従つて編輯に當る者は、先づその方面に對する一應の關心を怠つてはならないと思ふ。しかるに率直に云へば、本書は聊かその點に缺くるところがないであらうか。例へば使用活字の選擇にしても、本文より傍註・追筆に至るまで全部リボのベマ刷りでは、餘りにも曲がなさすぎるであらう。なほその中に活字號數を按配したる文書も存するに至つては、餘りにも統一がなさすぎるではなからうか。之らは校正者の技術によつて、遙に典雅

に讀み易くなし能ふ問題であつたと思ふ。なほ言へば、許す限り上欄に空白を残して素出の便を計るとか、行間を開いて文書の品格を保たしめるとか、もう一段の注意と親切が欲しかつたと思ふ。更に圖版の存する文書と讀本を照合したところ、早くも一、二正誤表に載らぬ不覺を見出したことは、返す／＼残念なことであつた。圖版も餘り推賞し得ないし、裝幀も甚しく品位を缺く。

さはいへ近頃出版のことは、頗る窮屈になり行くといふ。是らの不潔もさうした種々の條件に災せられた點、少しとしないであらう。今や 天皇の御聖徳を追慕し奉り、國體の本義にもとづく崇高なる御精神を、永へに仰ぎ奉るべき時に當つて、本書の出版せられたることを、深く慶賀するものである。(菊版、假綴、本文三七四頁、圖版二十四葉、非賣品) (林屋辰三郎)

## 滿蒙の民族と宗教

赤松智城・秋葉隆共著

滿蒙の諸族は古く我々と民族的にも文化的にも近親な關係を持つ民族である。我が民族文化の幾割かその源流をこの方面に發するとの豫想は必ずしも失當であるまい。また新しい政治關係の方面よりするも、日露戰役以後この地域が國家的に如何に重要性を持つものなるかは我々が身を以て體驗して居る現實であり、滿蒙が我が生命線的存在として我々に對して在ること既に三分の一世紀に達して居る。にも拘らず、この境域に對する人文的研究は史學を除く外概ね不振であり、取りわけ民族學的研究に至つては

餘りに貧弱であつた。今日まで滿蒙民族に關する研究資料と學說の殆んどは歐米諸學徒の勞作に負うて居る實情である。誠に残念な事實である。好學的な期待からのみそれを悲しむのではなく、我が國家の政策と文化能力を反省せざるを得ない氣持にさへなるのであつた。が幸ひこゝ數年來かうした失望と不安とは幾分消去されつゝあるは慶賀すべきであるが、この時に當り赤松秋葉兩教授の本書を迎へ得たことは大早に雲霓を望み得た氣持である。

本書は先頃公にされた同著者の「朝鮮巫俗の研究」の姉妹篇にしてその構成もほゞ前著に準じて居る。本書は本文四一六頁の外に二百葉に近い寫眞を參考圖録として居り、僅かな紙面で全貌的によく紹介することは困難である。以下その節目を列記的に掲げ、本書未讀の諸彦の參考とし度い。

第一、總説——北アジアの民族と文化、薩滿教の意義と起原、

薩蒙宗教の系統と類型の三項よりなり、シベリヤ及び滿蒙に於ける民族及び宗教に關する今日までの歐米學徒の諸研究を批判しつつその探るべきを採り、以て本書の企圖する研究への準備的知識を供して居る。思慮深い著者は概ね斷定的な論議を避け、問題を多く後日にゆづられて居るが、吾人のこの概説によつて得るであらうところの便宜は少くない。シベリヤ及び滿蒙諸族の民族關係とその文化系統とは甚だしく錯綜して居り、その高次の複合性の故に吾人の理解を常に困難ならしめて居るのであつて、この方面の人文研究に觸れたものは何人でもこの點で少からず困惑した經驗を持つて居よう。この意味で總説の説くところはよき入門的指